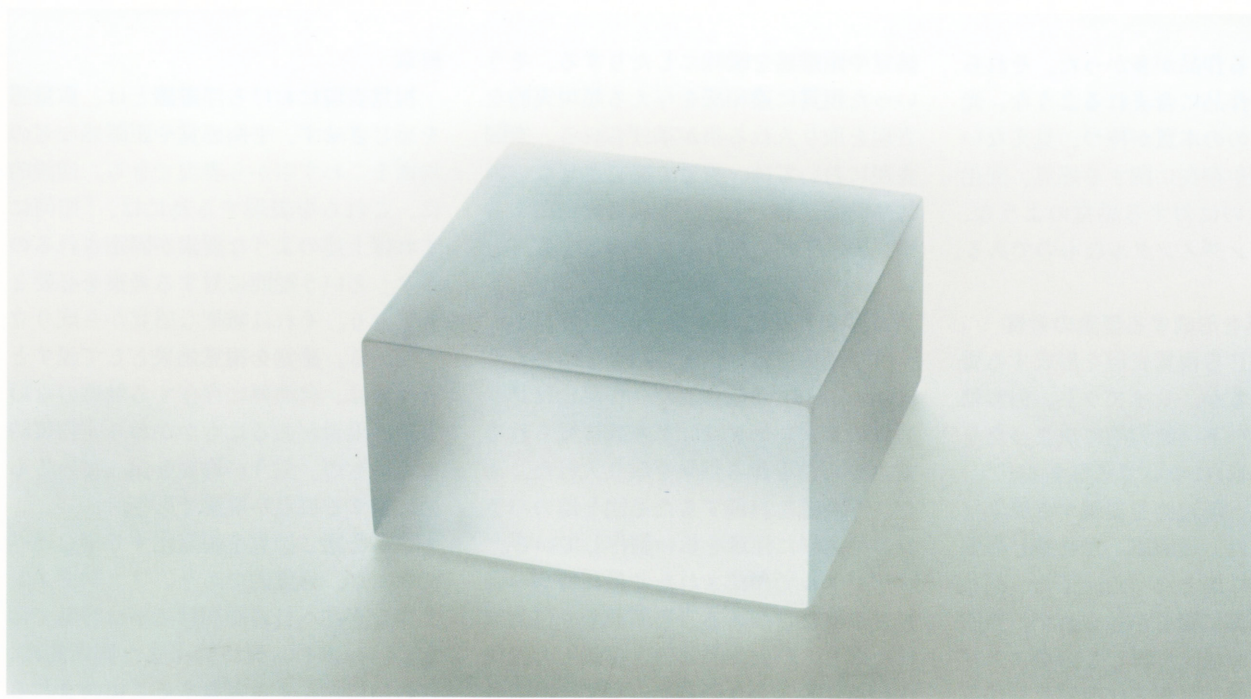
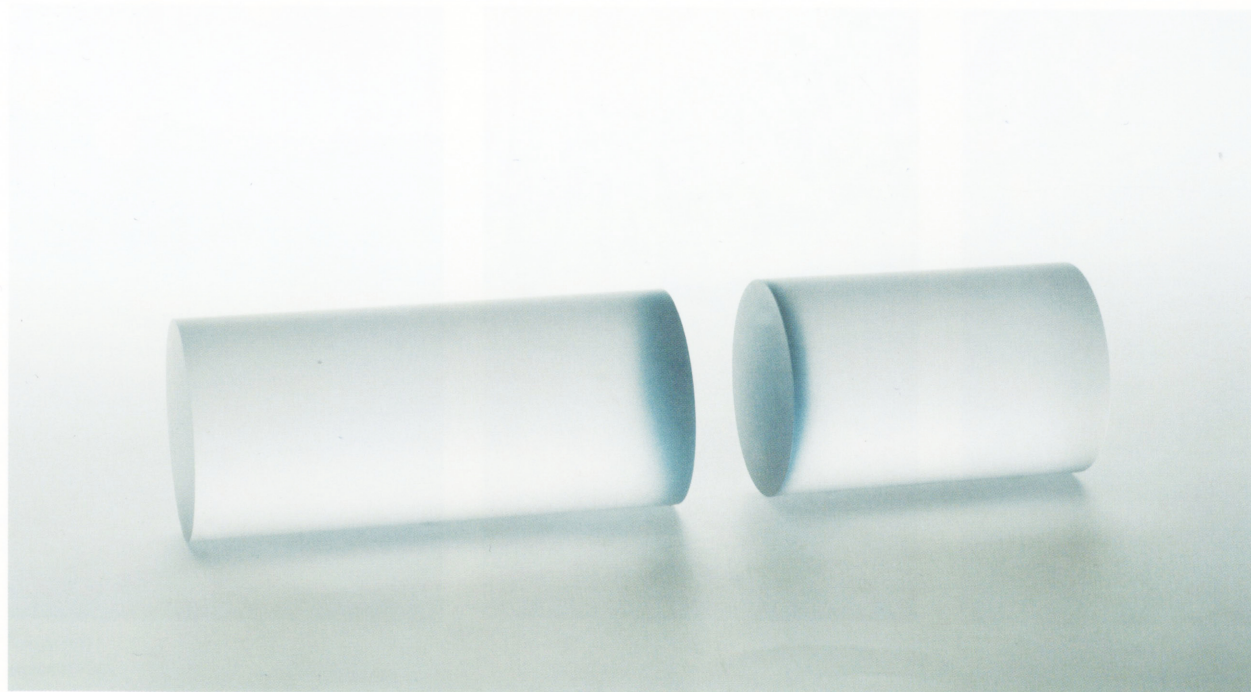


遠藤 章子
ENDO Shoko

空白とガラス 作品「空白のかたまり」及び研究報告書
Void and Glass Work "Block of Void" with Research Paper

デザイン学領域群 クラフト領域



空白のかたまり
"Block of Void"
上：100×400×100mm
下：90×170×170mm
ガラス
2012 年

序：はじめに

透明なガラスのかたまりは内側に光を溜め込む。沈黙を纏い静かに柔らかな光を放つガラスのかたまりは、空間に満ちる光を切り取ることによって空間に空白の輪郭を描く。かたまりのガラスが切り取る光に空白を見出すことにどのような可能性があるのか考察し、筆者自身がガラスを素材とした造形制作を継続していく上での核となる、作り手と素材であるガラスとの間に成り立つ関係性を見出すことを本論文の目的とした。

第一章：ガラスと工芸

まずガラスの素材的特性と技法をまとめ、またスタジオグラス運動とその後の展開からガラスを始め工芸的素材を用いたものづくりにはどのような可能性があるのか考察した。

ガラスは高温で熱せられると可塑性を持ち、常温では石のように硬くなる。原子配列が不規則な非結晶質であるため衝撃に弱く割れやすいという点において扱いづらい素材ではあるが、透明で光を透過するという素材特有の魅力から、これまでに様々な技法・技術が発達してきた。アメリカにて始まったスタジオグラス運動はヨーロッパ各地や日本にも波及し、ガラスは作家が個人で扱える素材として広く普及した。しかしその動きも落ち着きを見せると、ガラスを単に表現のための一素材として相対化することの問題点などが様々に指摘されるようになった。

素材を限定し表現を迫及していくことと、表現のための手段として素材を選択することの根本的な相違は、ガラス造形だけに限った問題ではない。現在実際に素材と向き合う上で必要なことは、「工芸」や「美術」といった枠を超えた、作り手と素材との関係性の中で紡がれる新たな物語であると考えた。

第二章：「空白」と「存在」

筆者の造形における根幹となるものを明確にするため、本章ではかたまりのガラスが纏う気配の中に見出した「空白」と

いう言葉を起点にその性質についてまとめ、また不在を表わす「空白」に対する「存在」についても合わせて考察し論じた。

原研哉氏は著書の中で、空白は「無」や「エネルギーの不在」ではなく「機前の可能性」として示されると述べている。空白は「空っぽのうつわ」として機能し、また空白それ自体はかたちを持たないため、境界となっている輪郭を知覚することで空白は「存在」として立ち現れる。何かが存在するということは、それが「場所」に開かれているということの意味する。哲学者・上田閑照氏は「場所」について、それが日常の経験空間とそれを更に含む包括的空間の重層構造となっているということ、また「場所」を追及していくとそれが無限の広がりを持ち、最終的には「虚空」が開かれると述べている。

「空白」そして「存在」についての考察から、日常の経験空間の中で「虚空」を知覚することによって、そこにあるという存在の事実そのものに触れることができるのではないか、またかたまりのガラスが見せる光はそのような存在性の根源を感じさせる可能性を宿した「空白」であると言えるのではないかという考えに至った。

第三章：作家例から

作り手はどのような関係性をもって「素材」から「かたち」を生み出すのかという点について考察するため、作家二名を例に取り上げた。

井上剛氏の「作ることで確認をしている」という言葉は、常にプロセスの通過点であるということの意味している。何を作るかが制作行為の目的となるのではなく、素材と向き合うその過程で何が出るのかを探り続けることが素材と向き合った先に生まれる造形において重要な要素となる。

一方多和圭三氏が鉄のかたまりを叩き続けるその時間の中で、手を加える「作家」と素材である「鉄」という関係性は、「もの」と「もの」という関係性へと変化する。質と量を持った「もの」に変化した鉄

は、それぞれが「ただそこにあるもの」という存在性の根幹に通じる風景を感じさせる。

素材と対峙することは、ただ作品を制作することだけが目的地点であるわけではない。かたちは作り手と素材とが関係を紡ぐ過程の中で生まれ、「もの」として輪郭を持って立ち上がり、それが空間にどのような現象を生むのか、またはそこから何が発見されるのかといった「もの」があることによって生まれるある種の風景を開くことが、素材との対峙によって「もの」を作るということの先に求められているように思われた。

第四章：研究報告書

本章では筆者がどのような思考を持って作品《空白のかたまり》の制作に至ったかという点について述べた。自己と素材の関係性についての思考を整理するとともに、キルンキャストによる作品の制作プロセスをまとめた。

筆者はかたまりの内側に満ちる光を意識しながらガラスと向き合う中で、かたまりのガラスと「空白」の関係性を見出した。またそれらを空間的に配置することで空間における「空白」を知覚させる風景が気配として現れるのではないかと考え、制作に取り組んだ。

終章

素材の歴史と特性、それを踏まえた上で筆者自身の意識の中心に浮かび上がる「空白」という言葉を起点とし、ガラスを素材にかたちを作ることににおける自己と素材との関係性について本論文では考察した。どのような背景を持ち素材であるガラスと向き合うか。「空白」という言葉を介することによって、筆者自身とガラスの関係性を紡ぐことが可能となったと言える。かたまりのガラスが纏う気配を感じ取ることで、そしてガラスの輪郭の内側に溜まる光の表情を捉えることの中に、ガラスの空白が宿す可能性の一端が垣間見えると結論付けた。